◎　タクミの場合。

◎　コウタの場合。

◆　タクミの場合。

　母親は女だが､その女というものは理解し難い生き物だと思うことが多い。
最近とくに、タクミはそう感じていた。
熟女が好きだとか、近親相姦（そうかん）に憧（あこが）れていたとかそんなことではなかった。

　だが、実際に母親と交わってみると悪いものではなかったのだ。

　自分のしらない女としての母親の一面が一面が見えることの新鮮な驚き。
これがどうでも良いようなオバサンならば気持ち悪くおもったかもしれないが、息子が見てもエロい感じがする熟女だったからだ。

　なぜ、こんな関係になってしまったのかは、自分でも良くわからない。

　精力と性欲が渦巻いていて押さえるのに苦労する年ごろでは、簡単なことで暴走する。

　だが、相手が母親となと話が違う。
そもそも性欲の対象になってはいない。
それが男女の関係になってしまったのは、タクミではなく母のミユキが積極的だったからだ。

　少し自分たちはおかしいんじゃないかと、何度も思った。
アダルトビデオとは違って、こんな場合は息子の方がこたえるものだと実感していた。

――それにしても……。

（……母親のくせに、なってエロい身体してやがんだ。あの胸といい尻といい……）

思い出してもこ間が熱くなってくる。
大人の女を抱いた。
それをひしひしと実感するようなセックスだった。

肉感溢（あふ）れる柔肌の感触。
若い肉体にはない崩れかけたような独特の猥褻（わいせつ）さがあった。
それは熟し切って枝から落ちる寸前の果実のようでもある。

それを実感させてしまってからは、母親であって母親ではないと複雑な心境を強く抱くようになった。

（……なぜこうなってしまったんだ……）

重く受け止めているのは息子の方だ。
これからどうやって一緒に暮らしていけばよいか、分からないからだ。

もともと楽天的というか、子供が見ても呆（あき）れるほど子供のようなところのある母親だった。

親子仲もとても良かった。
それに少し変っている。

性に関しても平気で息子と話をする。
それも、わい談としてだ。
まるで友達同士でわい談を愉（たの）しんでいるかのようだった。

（……親が子供とするはなしかよ……）

　と、タクミはずっと思っていた。
それくらい平気で話しをするのだった。

　タクミは母親のミユキと二人暮らし。
父親は早くになくなっている。
才能があるのか、ミユキはの空間プロデューサーという仕事で成功して裕福な暮らしをしていた。

　父親がいないせいか、昔からタクミことを友達のように扱っている。
実際、母親がないときは家でタクミが食事や洗濯掃除といった家事全般をこなすことも良くあった。
どっちが年上なんだよと、タクミが感じることも多くあった。

　文句を言ったり言われたりするのが、タクミたち親子の関係だった。
そんなタクミに甘えているのか、時々、羽目を外して帰ってくる。
飲み歩いたのか、ひどく酔っぱらって帰ってくることも多かった。
そんなとき、介抱するのはタクミの仕事だった。

　ムッチリとした女の肉が一杯に詰まっている。
そんな感じさえするミユキの肉体をベッドへ運んで寝かせたりしている。
触れる肉体エロく悩ましい感触。
身体が自然と反応してこ間が疼（うず）くように硬くなってしまう。

　それこそほんの僅（わず）かの刺激でこ間が疼（うず）く年頃（としごろ）だ。
マスターベーションも日に、二度も三度もして当たり前。

そんな性欲も精力も有り余っている若者に、この魅惑的な肉体は
刺激的過ぎた。

　時には服を脱がせてやる時に、胸を触ったり尻を撫（な）でたりすることがあった。
変な意識はなかったものの、時には抱き上げてベッドまで運んでいると
自然と押し付けられた触れたりする。

　その感触は決して嫌なものではなく、触れている間に股間（こかん）が自然と強張（こわば）ってくる。

　それが段々とエスカレートして、いつしか感触を愉しむように触るまでなった。
それに母親のミユキも悪かった。

　時々、わざと服を脱いだり、挑発的な行為をしている。
酔ってのことで忘れていることも多かったが、ちゃんと覚えていることもあった。

　それが母親としてやってはいけない行為だとは思っていなかったのだ。
時には、わざと自分からキスすることさえあった。
それもちゃんと唇へ――わざとである。
酔っているときはそれがディープなベロチューとなる。

　母親としての顔よりも、女としての顔を意識するようになった。
まるで年の離れた兄弟のような関係だったが、アルコールが入った　時には女として接したくなってくるようだ。

「ホラホラ、見て。ママのオッパイ大きいでしょう」

と、何度も生乳を見せられた。

　その度にその量感溢れる乳房を見て、股間（こかん）を熱くしていた。
乱れた姿のまま、眠ってしまったミユキの乳房を触れ、感触を確かめるように揉（も）むこともあった。
いつしか、マスターベーションのオカズにしていた。

　気が付けば若い女の裸よりも、人妻や熟女に興味を示すようになっていた。
我ながらどうしたんだと思いながらも、母親の肉体を思い浮かべてしまう。

　そんな時だった。
時々、母親がオナニーをしているのを知った。
隠してあったバイブレーターを見つけてしまったのだ。

どうやら酔って帰ってきたときに、使っているらしいことまで分かった。
枕のしたに隠してあるのを、偶然見つけてしまった。

――なんだよ、これ――。

ドキドキした。

　生々しい母親の女としての一面だった。
どうして良いか分からなかった。
我慢できずに、母親の脱いでおいてあった下着を使ってマスターベーションするまでになってしまった。

――くそっ、ますます変態になっていくようじゃないか――。

　自分でもおかしいと思いながらも、気持ちを抑えきれなかった。
母親とは思えなくなっている。

　頭の中の妄想が暴走を初めて、静まってくれない。

　考えるまいとしても、母親がバイブレーターを使って悶（もだ）えながら自らの手で肉体を慰めている画が浮かんでくる。

（……本当に、あんなもの使ってオナってるのかよ。母親だといっても一人の女だから、そういうこともあるのかも知れないけど……）

　どうしてもそれを確かめたくなった。
スマホを利用すれば、気付かれないように盗撮することでができる。
家電品の操作をすべてタクミが教えているので、仕掛けるのは簡単だった。
酔ってかえってきた時に、ベットに寝かせてから母親のスマホを使って盗撮できる位置に置いておいた。

　それで別の場所から、スマホを操作して画像を送ってるようにしたのだ。
そして、それを時々眺めていた。
テレビを見ながらスマホを時々確認していたが、思わずテレビの声を絞って食い入るように眺めている。

『……あ、……あ、ああふぅ……』

「———！？」

（……やっぱりそうか……。本当に、あのバイブを使ってるんだ。…
それも何だよ。大きな喘（あえ）ぎ声出しやがって、それにバイブを動かすだけじゃなくて、胸も出して悶（もだ）えてやがって……）

　複雑だった。
同時に、ますます母親とは思えなくなってくる。

熟女系のＡＶでも、確実に美人の部類にはいると映像をみながら確信していた。

　思わず、猛（たけ）り狂っている自分の股間をしっかりと握る。
とても我慢できるような映像ではなかった。
そんなタクミの行動を見透かしたように、ミユキの手の動きが激しくなった。

　喘（あえ）ぎ方が堪えたものから、歓喜なものへと切り替わっている。
知らず知らずのうちに、タクミの手の動きも激しくなった。

　どこか熱にうなされているような切ない喘ぎだった。
そこには母親という母性の影はまったく見あたらなかった。
一人の女の生の姿だった。

自ら与えている快楽を貪（むさぼ）るメスであった。

やがてミユキの身体が仰（の）け反るように跳ねた。
オーガズムをむかえていたのである。

　声もたてずに何度か痙攣（けいれん）のように身体を仰（の）け反らせている。
タクミは自分がミユキとつながっているかのように、大量の粘液を自らの手の中へと放出していた。

……そんな時だった……。

　ミユキが、タクミの部屋にある自分の下着、ショーツを偶然に見つけてしまったのだ。
この日も少し酔ってかえってきた。

　タクミに抱えられてベッドへ連れて行ってもらわなければならないほど酔っていなかったのが災いした。
酔うと陽気にもなるミユキだった。
タクミをからかいにやってきたのだ。

「なんだよ、勝手に入ってくんなよ―――！」

「見つけたわよ、これ……。ママのパンツ隠していたでしょう。いいのよ、男の子なんだから。ホラ、ホラ……」

「や、やめろ――」

　わざと目の前にかざしていた。
タクミの部屋に入って来るなり、そういった。
隠してあったとは、洗濯機に入れてあったはずものが外にでていたと言うことだった。

　時々、タクミはショーツを使ってマスターベーションしていた。
そのままならばバレるので、手洗いしてから洗濯機に入れていた。
それを見つけてしまったのだ。

「ふ～～ん……。そうかぁ……。下着がいいのねぇ…。こういうの履いてるとやっぱり見たいんでしょう」

「やめろ、バカ――。で、出てけよ―――！」

　ミユキは穿いているスカートをめくって見せた。
ミニスカートだった。
ミニスカがおかしくないような熟女だった。

「なんて格好してんだよ。ちっとは歳考えろよ」

「ほらほら、パンチラ、パンチラだよ〜〜。熟女のパンチラ〜〜」

　パンチラどころか、パンモロである。
それもピンクのビキニショーツにガーターベルトを着けていた。
やたらとエロイ格好だった。
外で男を作っているのかも知れないし、飲んできているときはだいたいがエロい服装をしている。

　そんな母親の姿を見ていると、複雑な想いが増してくる。
「やめろ」と怒りながらも、股間が熱くなってくるのを止められなかった。
改めて見ると、ますます自分の母親とは思えなくなってくる。

「ほら、パンチラだけじゃないぞ。胸チラだ。オッパイだ」

――と、片方の乳房を出して見せた。

　ハーフカップのブラジャーで、殆どノーブラに近いものだった。
それにどうしてこうも見せたがるのかと腹立たしくなってくる。
自分がこれほど我慢しているというのに、それをからかいやがって。

「いい加減にしろよ。何だよ、こんなもの――！」

「――フフン――」

「――――！？」

　思いっきり握った。